KYT 学習会による重症心身障害児(者)病棟看護師の意識の変化

—患者安全のための看護実践自己評価尺度「病棟看護師用」を用いて—

衣笠花恵¹⁾ 徳田恵¹⁾ 圓井和恵¹⁾ 古田道枝¹⁾
矢島玲子¹⁾ 中川康江²⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟

2) 鳥取看護大学看護学部看護学科

Changes in awareness of nurses in a ward of children and persons with severe motor and intellectual disabilities due to the KYT training conferences

—Using the nursing practice self-rating scale for patient safety for ward nurses—

Hanae Kinugasa¹⁾, Megumi Tokuda¹⁾, Kazue Marui¹⁾, Michie Furuta¹⁾,
Reiko Yajima¹⁾, Yasue Nakagawa²⁾

1) The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing

要旨

重症心身障害児(者)は、自らの心身の不調をはっきりと自覚したり、それを言語で表現することができない場合が多く、さらに状態の悪化を招きやすい。20YX 年度 A 病院 B 病棟のヒヤリハットの発生は、看護師経験年数、病棟経験年数に関係なく発生していた。危険の知識は、看護業務や行為の視点から、それがなぜかを理解していることであり、看護師の危険予知技術が求められる。本研究では、『患者安全のための看護実践自己評価尺度-病棟看護師用-』を用いて、B 病棟に勤務する看護師の患者安全に対する意識調査を行い、それをふまえて危険予知トレーニング（以下 KYT とする）の学習会を行い、その後の意識の変化を調査した。その結果、KYT 前より、KYT 直後、KYT1 ヶ月後の得点の平均が高くなり、看護師の患者安全に対する意識の変化がみられたため報告する。鳥取臨床科学 11(1), 27-33, 2019

Abstract

Children and persons with severe motor and intellectual disabilities are often unable to clearly recognize their mental and physical disturbance or express it verbally, which can lead to further deterioration of their status. Near-miss events in fiscal year 20YX in the B ward of Hospital A had occurred regardless of the number of years of nursing experience and the number of years of ward experience. From the viewpoint of nursing work and roles, they should understand why such event happened. Nurses need to accumulate knowledge regarding risk and acquire skills in predicting risk. In this study, the "nursing practice self-rating scale for patient safety for ward nurses" was used to investigate the awareness of patient safety among nurses working in

ward B. Based on this, training conferences on *Kiken Yochi* (risk prediction) training (hereinafter, KYT) were conducted to investigate the changes in the awareness thereafter. The results showed that mean scores were higher immediately after and 1 month after KYT compared to before KYT, and that nurses' perceptions of patient safety had changed. *Tottori J. Clin. Res.* 11(1), 27-33, 2019

Key words: 重症心身障害児(者), 危険予知トレーニング(KYT), 患者安全, 看護実践自己評価尺度; children and persons with severe motor and intellectual disabilities, *Kiken Yochi* (risk prediction) training (KYT), patient safety, nursing practice self-rating scale

はじめに

「重度の知的障害と重度の肢体不自由を重複する」と定義される重症心身障害は、病態としては重度の脳障害が基盤にある。脳障害に起因する運動障害、精神発達遅滞、てんかんなどととも、二次障害として様々な合併症がみられる。そのため、重症心身障害児者は自らの心身の不調をはっきりと自覚したり、それを言語で表現することができない場合が多く、さらに状態の悪化を招きやすい。

A病院B病棟は重症心身障害児(者)病棟で、患者数は53名、平均入院年数は22年以上と経過が長い。長期間の入院生活の間に、activities of daily living (ADL) が低下し、日常生活は全面介助、または部分介助を必要とする患者が100%であり、個別的な対応が必要となっている。また、患者の平均年齢は54歳と高齢化しており、年々医療処置も増加している。医療の高度化・複雑化に伴い、患者安全とリスクに関する知識を統合して看護を提供することが求められている。

20YX年度、B病棟では0~3aレベルのヒヤリハットが73件、3bレベルの医療事故が2件発生した。ヒヤリハットの発生は、看護師の経験年数、病棟経験年数に関係なく発生していた。川村¹⁾が述べているように、B病棟の傾向として、経験年数が1年未満の看護師は患者の状態把握が不十分なまま患者に関わっており、経験年数が5年以上の看護師は、長期間患者と関わってきた経験値から、慣れにより危機感が薄れて患者に関わっていると

考えられた。そこで、患者安全のための看護実践自己評価尺度-病棟看護師用^{2,3)}を用いて意識調査を行い、それを踏まえて危険予知トレーニング(KYT)⁴⁾の学習会を実施した。KYTの第二ラウンドまでを行ったことで、B病棟看護師の患者安全に対する意識の変化がみられたので報告する。

なお、今回の研究において、「ヒヤリハット」は日本医療機能評価機構の定める基準とし、「3bレベル」は本来必要でなかった治療や処置が必要となるレベルとし、「0~3aレベル」までがヒヤリハット、「3bレベル以上」が「医療事故事例」とし用いた。

1. 研究方法

1. 研究目的

患者安全に対するKYTの学習会を受講することで、重症障心身害児(者)病棟看護師の学習会前後の意識の変化を分析し、得点の変化を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

1) 研究対象

B病棟に勤務する看護師に研究趣旨を説明し、研究に賛同を得られた看護師31名を対象とする。

2) 研究期間

20XX年9月1日から20XY年3月31日まで。

3) 研究場所

A病院B病棟。

4) 方法